

【月刊】

キャッチ ピース

50

通巻129号 / 1997.2.20 定価100円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大幅軍縮を！
米軍基地を撤去しよう！
反核運動を継続し、核廃絶を！
憲法9条を世界に！
市民による平和政策を提起しよう！
草の根の国際共同作業を進めよう！



名護市辺野古地区で

沖縄市民フォーラム・第6回全国
会議特集号②

基地は
いら
ない
どこにも

基調報告 ● 新崎盛暉 / 新倉裕史

● 元気をもらった三日間 沖縄から ● 伊波洋一

劣化ウラン弾発射に抗議する！

「海兵隊撤退」の声を上げよう！

● 維持会員 (月額) ● 参加会員 (月額) ● 通信会員 (年額)

個人 1口1000円 個人 1口 500円
団体 1口2000円 団体 1口1000円

3000円

(会費は本紙購読料を含みます)

脱軍備ネットワーク

キャッチ ピース

文議抗

一九九七年二月十一日 キャッチピース

米軍の劣化ウラン弾発射と 日米政府の情報隠しに抗議し 海兵隊の撤退を求めます。

アメリカ合衆国大統領 ビル・クリントン様
内閣総理大臣 橋本龍太郎様

米海兵隊所属のAV8Bハリアー機が
1年前、沖縄・島島射爆場で劣化ウラン
弾一五〇〇発を発射していたという外務
省の発表を聞き、私たちは驚き、怒って
います。

まず私たちは、本国では特定の場所
しか使用が許されていない劣化ウラン弾
をたとえ「誤用」であったとはいえ、大
量に島島に打ち込んだ米軍に強く抗議し
ます。さらに、「誤用」の事実を一年以上
も隠蔽したことは、住民を愚弄する卑劣
な行為です。もし、同様な事例が本国内
で発生したならば、米軍はかくも長期に

わたり事実をかくすなどということが
あったでしょうか。

さらに私たちは、米国から通報を受け
てから一ヶ月以上、事実を隠した日本政
府に対して、いっそう強く抗議します。
米メディアの発表を受けて公表に踏み
切ったという説明を聞いて、いっそう怒
りは深まりまっています。

日米政府は、沖縄の人々の基地に対す
る怒り、不安を何もわかっていないの
ではないか。「事故の際の適時の通報」を約
束した「SACO最終報告書」はいつた
い何だったのか。それは、基地の「再編・

統合」に名を借りた、更新・合理化計画
をくるむ「オブラート」でしかなかった
のか。私たちは根本的な疑惑を抱かざる
をえません。

米軍のおどろくほど杜撰な「弾薬カタ
ログ」管理の根底には、「事前協議条項」
の空洞化、訓練など運用の聖域化、地位
協定第三条の「基地管理権」の拡大など、
日米安保条約・地位協定の不正な実態
があります。加えて、米国は基地の環境
回復に責任を追わないとした、地位協定
第四条の規定が米国内よりも杜撰な
行動を許してきたのではないかと私たち
は考えます。

さらに言えば、今回の弾薬「誤用」は、
環境や住民の安全への配慮よりも作戦能
力の向上を優先するという軍隊の本性に
構造的に根ざしたものであるべきもので
す。軍隊の中でも、最も攻撃的格をも
つ海兵隊の駐留そのものが、この問題を
きっかけにして問われなければなりません。

私たちは日米政府に次のように要求し
ます。

(一) 米国政府は、劣化ウラン弾の持ち込

み・使用に関するすべての経緯を公開す
ること。

(二) 米国政府は、射爆場の環境調査の全
データを公開すること。

(三) 日米政府は、沖縄県・関係自治体
による現場への立ち入り調査を早急に行え
るよう措置すること。

(四) 日米政府は、沖縄県・関係自治体と
連携して国内法令に照らした環境調査を
実施し、その結果を公開すること。

(五) 日米政府は、弾丸の全面的回収をは
じめとする射爆場の環境回復が米国の責
任においてなされるよう、米国政府と交
渉すること。

(六) 日米政府は、基地内への国内法令の
適用、米国による環境回復義務の明記な
ど地位協定の包括的見直しを行い、米国
政府と交渉すること。

(七) 日米政府は、住民生活への脅威であ
る海兵隊の撤退を米国政府に求めるこ
と。

(八) 米国政府は、現在行われている戦力
見直し(QDR)の中で、沖縄及び日本
本土からの海兵隊の撤退を再優先課題と
して検討し、実行に移すこと。

以上

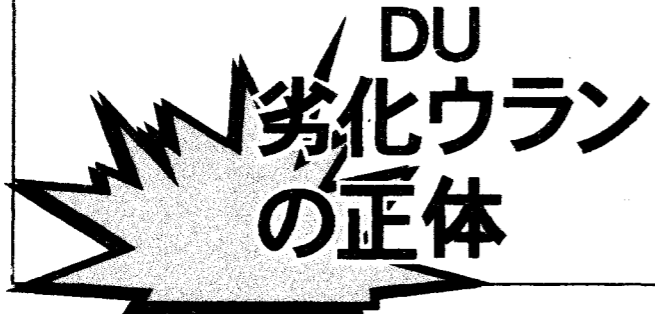
横須賀でも貯蔵!

●米軍は、劣化ウラン(以下DUと略)
弾を岩国と嘉手納の弾薬庫に現在も保管
していることを

認めた。さらに、
横須賀を母港に
する艦船十一隻
に搭載された二
〇ミリ高性能機
関砲(CIWS・
通称バルカン・
フアランクス)に
も劣化ウラン弾
が使われている
ことも明らかに
なった。DU弾は
在日米軍は「標準
装備」なのだ。

●天然ウラン鉱
には核兵器や原子炉燃料として利用可能
なウラン235は〇・七%しか含まれて
いない。残りのほとんどはウラン238
である。したがって、核兵器や原子炉燃
料に使うためには、核兵器の場合には九
三%以上、商業用原子炉燃料の場合には三

委小権人連国
たあげた
兵器
残虐



五%までウラン235の含有率を高め
る(濃縮する)必要がある。これら濃縮
ウランの副産物として、ウラン235の
濃度が〇・三%程度の物質が大量に生じ
る。これが劣化ウラン(DU)だ。濃度

こそ薄い放射
性物質であるこ
とには変わりな
い。ちなみに
鳥島で発射され
た砲弾には一個
あたり約一四七
グラムのDUが
含まれている。
これを一五二〇
発撃したのだか
ら、鳥島には二
二〇キログラム
以上のDUがば
らかまれたこと
になる。

湾岸戦争の遺産

●DUを弾芯に用いた砲弾の開発は八〇
年代に始まった。DUは比重が大きい
ので、砲弾の破壊力が飛躍的に高まり、戦

今号では「低空飛行アンケート」を大きく取り上げると予告しましたが、内容を変更してお送りします(編集部)。

基地はふるなふるないども

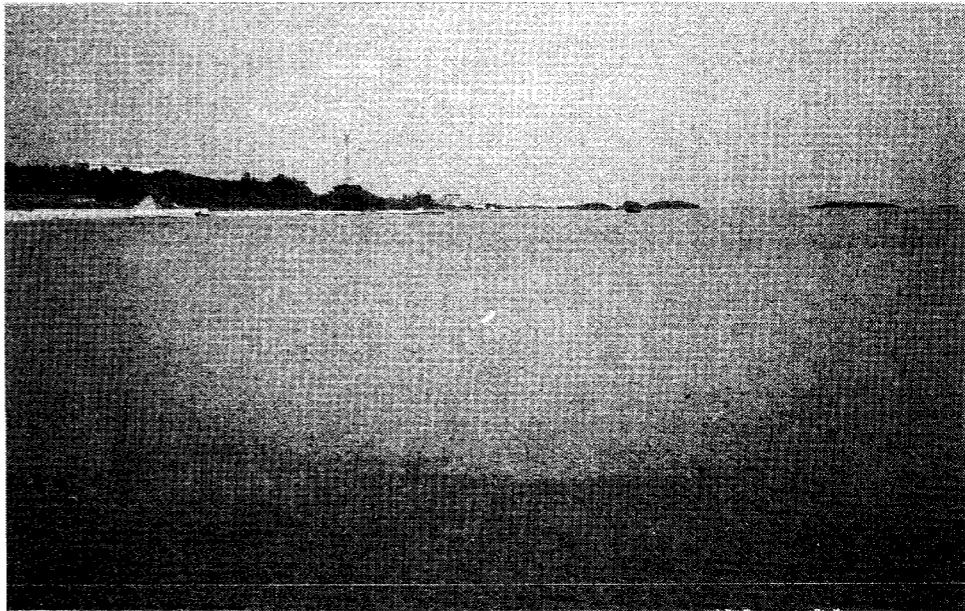
97.1.25~27
教育福祉会館
(那覇市)

報告①

現在、沖縄の基地問題の焦点は二つあると言っているでしょう。一つは、二月二日から第一回の収用委員会公開審理が始まる米軍用地強制使用の問題。もう一つは、海上ヘリポートの移設、いわゆる「基地ころがし」の問題です。

公開審理の焦点

まず強制使用の問題から始めます。ご存知のように大田知事は去年の九月に公告、縦覧の代行を承諾し、その結果次の公開審理というステップを迎えています。ただ、もし知事が昨年九月に公告、縦覧代行を拒否していたとしても、福岡高裁那覇支部の裁判の結果によって橋本首相が代行するという形で、結果的には約一ヶ月の時差で、おそかれ早かれ公開審理という段階は迎えたでしょう。公開審理というのは、収用委員会が、土地を取り上げたい側と提供を拒否している側双方から公開の場で意見を聞く



海上ヘリポート建設候補地、名護市辺野古の海。左手はキャンプシニワブ。

基調報告

新崎盛暉

沖縄一坪反戦地主会代表世話人

海兵隊は 本土からやってきた

沖縄基地問題を考えるときに
忘れないでほしいこと

ある意味では裁判に似た形式の場です。そこでの焦点は、その中味。つまり公開審理の場で何ができるのかという問題です。

つまり、今回の公開審理の焦点は、「実質審理」によって何が獲得できるかという問題です。「実質審理」をしたというのは、土地所有者側、すなわち反戦地主、一坪反戦地主の主張でもありませんし、収用委員会もまた「実質審理」を行いたいと言っています。ただ、「実質審理」の中味については地主と収用委員会の考え方はかならずしも一致していません。反戦地主側は安保の問題、使用認定の問題を含めて強制使用に係る全ての問題を議論することを「実質審理」と表現する傾向があるのに対して、収用委員会の方は土地収用法や米軍用地特措法で与えられた権限を狭く、限定して考えようとするきざしがあります。両者の認識にはいささかずれがあります。

これに対して、もうひとつの当事者である国側は、「実質審理」を出来るだけやらさないと言う形で収用委員会に圧力をかけています。今日（二月二十五日）の琉球新報の朝刊には次のような東京発の記事があります。防衛庁の首脳が、「収用委

員会の審議というのは理論的にはもとの地主と一坪地主を分けて出来るはずだが、三千人の全員から意見を聞くという前提で、会場確保などのために第一回が二月二一日になった。収用委員会も苦勞しているようだ」と述べ、一坪地主の参加で手続きが遅れることに懸念を表明した、という記事です。以前にも、防衛施設庁は三月に裁決を出して欲しいと収用委員会に申し入れたというニュースが報じられました。そうしないと契約期限の切れる五月十四日に間に合わないから、との理由からです（実際には三月に裁決がでて間に合わないはずですが）。

事実をねじ曲げる政府

国の主張は、第一回公開審理で、自分たちの裁決申請の申請理由を言ったら、後は意見を聞かなくていい、書面ですせばいいというものです。つまり、「実質審理」をできるだけさせないという考えが国側にはあります。

さらに今日の記事の中で「理論的にはもともとの地主と一坪地主を分けて出来るはず」という部分。これは意図的

に事実を歪曲したものです。たしかに当初収用委員会は、第一回公開審理に限っては二回に分けて審理をしたいと提案しました。しかし、それは一坪反戦地主と、ここでいう「もともとの」反戦地主とを分ける、という意味ではありません。三千人入る会場を手配するのは大変困難なので、全員の意見を聞くためには嘉手納飛行場とその他の地主を分けたいという提案でした。それを、国は、「一坪」と「もともとの」反戦地主という具合に問題をすり替えています。

嘉手納飛行場は一坪反戦地主がもつとも多い基地ですが、「もともとの」反戦地主も多数存在しています。一坪反戦地主は普天間基地にも約六〇〇名います。し



たがって、数の上でどうやって分けたらいいのかというのが収用委員会が苦心したところでした。われわれは、最初から一本でやれというのが主張でしたし、一坪反戦地主は全国に分散しているのだから、三千人の会場は必要ないといいました。そこで収用委員会は二月二一日に一本化する判断したのです。

その意味で収用委員会の対応は合理的なものでした。それを国は、「もともと地主」と「一坪反戦地主」を理論的には分けて審理できると言っている。だが、分けて審理するのは理論的に不可能です。施設によって状況が違うから施設別に行くということは出来ませんが、地主の立場で分ける、などというものは理論的にそもそもあり得ない話です。このように問題をすり替えて、くりかえし収用委員会に圧力をかけているのが防衛施設庁の対応なのです。

この状況の中で、施設別に様々な異なる土地の使用状況などを踏まえながら実質的に何ができるのか、これが当面の課題のひとつになろうと思います。

もう一つ強調したいのは、公開審理の「内側」で出来ることには限界がある、と

いうことです。公開審理を焦点にして、公開審理の「外」にいかにして幅広い大衆運動を作り出すかということが問われています。

お手元に、「沖縄百万人署名運動」のニュースがあります。これを読んでください。百万人署名が請願事項として上げているのは、次の三項目です。

- 一) 沖縄の軍事基地を大幅に縮小・撤去し、基地のトライ回しをやること。
- 二) 住民の人権を守ることを優先して、在日米軍の地位に関する協定を見直すこと。

この署名運動は、特別立法阻止のための特別立法を行わないこと。

この署名運動は、特別立法阻止のための運動とわれがちですが、そうではありません。特別立法それ自体については、私がここに書いておられるように、様々な条件の中でやっつけない場合もありうる。(囲み参照)。しかしこの署名運動は「公開審理」の内側での実質審理をさらに全国的に発展させる運動として、非常に大きな意味を持っていると私は考えています。

く報告があるでしょう。私は、その背景について問題提起したいと思います。

沖縄の在日米軍基地のうち、中南部にある嘉手納基地、普天間基地などは一九四〇年代、第二次大戦直後に作られた基地です。住民が収容所に入れられている間に土地を囲い込んだか、あるいはその後、銃剣とブルドーザーで土地を取り上げて作られました。

これに対して、今問題になっているキャンプ・ハンセン、キャンプ・シユワブなどの北部の海兵隊基地一これらは沖縄の基地の半分以上を占めています。一は何時作られたのかと言え、それは一九五〇年代の後半のことでした。六〇年安保改定に向かうプロセスの中で作られたのがこれらの基地でした。

旧安保条約への日本国民の反発を背景にして六〇年安保改定が行われる。その前段として、一九五七年「岸・アイゼンハワー会談」が行われ、共同声明が出されました。その中に「一切の地上戦闘部隊を日本から撤退させる」という合意事項があります。ここでいう地上戦闘部隊とは基本的に海兵隊です。東富士の第三海兵師団などです。そしてこれら部隊が日本から撤退して行った先が、当時は

日本ではなかった沖縄だったのです。この歴史的経緯だけは、様々な基地反対運動を進めていく時の基本的な認識として持つておいていただきたい。

一九七二年以降、沖縄は「日本」になりました。四〇年前の岸・アイゼンハワー共同声明の「地上戦闘部隊を日本から撤退させる」という合意事項は、どのような手続きで無効にされたのか。あるいは、今でも沖縄は基本的に日本ではないという認識なのか。これが問われなければならぬ問題です。そして今、その海兵隊の県道一〇四号線越の実弾砲撃演習だけが、本土に舞い戻ろうとしている。この問題にどう対応するのか。

「安保」を問う

今日のタイトルにあるように、基地は「どこにもいらない」わけですから、演習の本土移転に反対する立場はあって当然でしょう。しかし、かつて海兵隊の基地が沖縄に移転する時にどのような運動があり、どのような論理が使われたかということは考えておく必要がある。私は別に沖縄ばかりにシワ寄せをするな、沖縄差別だ、ということをお願いしたいわけでは

(略)第一には、文字通りの強権的特別立法によって、米軍用地強制使用を国の事務として位置づけ、知事や市町村長、県収用委員会の権限を一切剥奪してしまいうり方である。政府にとつては、これが一番望ましい方法であり、地方分権委などでもこの考えが強い。しかし、これは、もっとも民衆運動を刺激しやすい場合によつては、連立政権の合意形成が困難な場合がある。地方分権委も、あえて火中の栗は拾わない態度である。

次は、米軍用地特措法を改正し、現在強制使用中の米軍用地については、県収用委員会の裁決が行われるまでの間、強制使用期限を暫定的に延長するという方法である。強権的な印象を弱めるためには、これを時限立法とし、今回の事態を切り抜けるためだけに使うということも検討するだろう。それでも試合の途中で負けそうになった側がルールを変更するようならめなやり方である。

そのうえ特別立法は、下手をすればつかく妥協させた大田知事をふたたび的回しかねない危険性がある。(略) (新崎盛暉「沖縄百万人署名運動」No.5, 1997.115より)

岸・アイゼンハワー合意

もう一つの焦点である基地ところがし問題に移ります。

今、沖縄でもっとも大きな問題になっているのは海兵隊です。その中で海上ヘリポート問題があり、移転先としてキャンプシユワブ水域などが上げられています。

現地状況などについては後ほど詳しく

ありません。ただ、この歴史的現実、経過を背負って今の基地反対運動があるのだということだけははっきりと認識しておかないと、本当の意味での沖縄とヤマトとの連帯は作れないだろうと私は考えています。限られた時間の中で特に強調したいのはこのことです。後は具体的に四人の方々が報告があるでしょう。

今考えなければならないのは、アメリカの戦略上海兵隊が必要かどうかという問題もさることながら、何のために、どのような歴史的経過において沖縄に基地が集中してきたのか、この基地がアジア地域においてどんな役割を果たしてきたのか、また今どのような役割を果たすために置かれているのかということではないでしょうか。つまり基地の一つ一つの現実、基地被害の現実から出発して、やはり私たちは安保なり日米同盟の問題を問い返さない限り、「沖縄の米軍基地問題」と狭く問題を設定したとしても、問題の本質に迫ることはできないのではないかと、そのことを申し上げて私の冒頭のお話にしたいと思います。

(テープ起)し・まとめ 田巻一彦

基調報告



新倉裕史

ヨコスカ運動宣言
ヨコスカ運動宣言
ヨコスカ運動宣言

基調報告 2

反基地運動 の復権を めざして

非核市民宣言・ヨコスカの新倉です。空母戦闘団の母港、そして海上自衛隊の拠点ヨコスカで小さな反基地運動をつづけています。キャッチピース運営委員の一人として、ヤマトからの報告を行います。

今日ここに集まったヤマトの反基地運動団体はおよそ三団体。文書による報告参加を含めると、在日米軍のほとんどすべてをカバーしているのではないかと思います。さきほど伊波さんにも伺ったのですが、おそらく市民運動としては、沖縄でこれだけの結集ははじめてだろうと思います。

もちろんそれは、ここが沖縄だからです。沖縄の皆さんの基地を拒否する熱い思いにうながされて、今私たちはここにいます。

沖縄の運動が安保体制の屋台骨を揺ら動かしています。五〇年間の基地の重圧に苦しんできた皆さんの、もう後には引かないとの思いを、私たち自身のものとしたいと、それぞれの地で、沖縄との連帯を求めて取り組みを重ねてきました。今日この会場においていただいた有銘さんをはじめとして、たくさんの方々足を運んでいただき、沖縄の心を語って

いただきました。

そうした出会いを重ねる中で、当然のように明らかになってきたのは、ヤマトの私たちのあり方です。沖縄ガンバレルの応援団を越える、自立した運動を作り出すことが、沖縄の心に込める本来の姿ですが、まだ胸をはって皆さんに報告できるものを、私たちはま作り出せていません。

ヤマトの運動が力を持ち、沖縄と連帯して政府の政策を変えていく方向をどうすれば作りだせるか。問われているのは私たちの運動だということをもう一度確認し、今日、明日の集まりが実り多いものになることを願っています。

私たちの取り組み

基地とはなにか、軍隊とは何かを沖縄の運動は問いつづけています。量的な違いは、現実のものとしてありますが、ヤマトの基地群も、本質的には沖縄と同じ構造をもて、私たちの前に存在しています。

この構造を全国からあぶりだす作業として、私たちはいくつかの取り組みを行って来ました。

◆地位協定の見直し

ひとつは地位協定の見直しです。沖縄県が発表した「見直し案」は画期的なものでした。沖縄案には、自治体が基地問題の解決能力を持つという決意が貫かれています。国内法の適用、自治体への基地の立ち入り調査権の確立など、自治体と基地との向き合い方が明確に描かれています。

残念ですが、沖縄県に続くヤマトの自治体はまだ現れません。見直し要望は多くの自治体、地方議会から上がっていますが、見直し項目を政府に具体的に突きつける作業は、まだどこにもないのです。

私たちは第二の基地県・神奈川が、沖縄県に続くべきだと。何回も交渉を持ちましたが、県はいまだに見直し案作り着手しようとしません。それならば、市民が作ろうと、今日、神奈川の市民の見直し案を持ってきました。ぜひ、ご意見をお寄せください。

低空飛行や民間港への入港など、全土基地方式の安保は、基地のない地域にも、危険な姿を見せています。あるいは二四条の経費負担。「思いやり予算」の問題は私たちの税金に係わる問題ですか

ら、これは地域を越えた全国的な課題です。関西からは思いやり予算を裁判で問う取り組みが始まろうとしています。「我々の見直し案」を、全国の市民や自治体を作り、でたらめな安保法体系を揺さぶりたいと思います。

◆低空飛行問題

低空飛行の問題にも、私たちは積極的に取り組んで来ました。二二日に調査結果を発表しましたが、広い範囲で危険な低空飛行が行われている事実があらためて浮かび上がってきました。基地とは遠い地域で、生々しい安保の実態が見えています。すでに高知県をはじめとする基地のない自治体から、地位協定見直しの声が上がっています。こうした動きと反基地運動が共振しあえる関係を作り出せないでしょうか。さらに事実を掘り起こし、低空飛行の実態を告発したいと思えます。

◆軍縮キャンペーン

在日米軍基地が一向に削減されず、むしろ増えている大きな理由に、日本政府の気前井のい資金提供があります。思いやり予算の裏金を、地位協定二四条の表

金と合わせると、在日米軍の駐留経費の七〇%は私たちの税金です。基地を無くすためには兵力の削減は不可欠ですが、日本政府の資金提供が、逆に兵力を呼び込んでいます。

さらに膨張しつづけるわが国の軍事費。人件費の占める割合が高いというのも、一切の軍事力を持たないという世界の人々への約束とのギャップはおびただしいものがあります。

直接基地と対する運動と違って、この手のキャンペーンは、小さな市民運動には荷が重いものです。しかし、こうした問題を引き受けてくれる政治勢力が姿を消しつつある今、私たちはささやかであれ、問題のありかを指し示すことだけはしようとして、ハガキキャンペーンをつづけてきました。会場の後ろの壁に、ハガキを展示していますので、ぜひご覧になってください。

少数者の抵抗と 新たな切り口

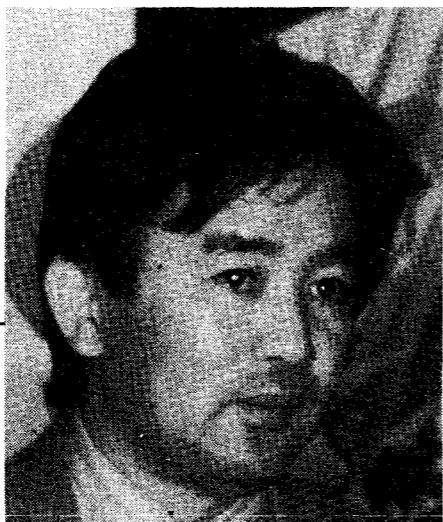
ヤマトの反基地運動は、大きな政治勢力が人々の動員を行う形から、組織的には何の後ろ盾もない市民や、自立した労働組合の自発的参加の運動へ移行してい

基調報告

海兵隊の撤退を 求める市民の ネットワークを！

伊波洋一

沖縄県議会議員
キャッチピース運営委員



SACO合意の実施にあたって、県内移設先のあちこちで抵抗を受けている。毎日、「琉球新報」や「沖縄タイムズ」を見れば読めば、県内移設の問題が地域で大きな問題を引き起こしていることを理解できる。ヘリポート移設先は、嘉手納基地、キャンプ・ハンセン、ホワイチビーチと転々とし、キャンプ・シユワブやその沖合いへ、今度は東村という話もでてきた。県内移設はきわめて困難なのは明らかだ。この困難を行おうとしているのが日本政府や米軍だ。このことについて、どう取り組むべきなのか。沖縄県は兵力削減を求めて行くべきだと明確に意志表示をした。

米軍はすでに、世界中で三分の一の削減をしている。軍事費も三分の一削減した。だが世界全体の軍事費はもつと削減されている。世界の中で、一九七二年には二〇%を占めにすぎなかった米国の軍事予算は、今や世界の四二%を占めるにいたっている。三分の一を削減しても米軍の軍事優位性はますます強まっている。その中で特に沖縄、日本が突出して強化されている。今日の報告の多くがこのことを示しているとおもふ。

この日本の現状、沖縄の現状は何のためなのかきちんと問い直していきたい。十万人体制について米軍は日本政府の要請だという。日本政府は米軍の要請だという。互いに責任をなすりつけている。はつきりいうと、沖縄や日本の米軍兵力は過剰だ。しかし、これをどのように住民、市民、県民、国民に対して理解させていくのかについての取り組みは十分だった。日本各地で基地を問題化するときに、日本以外の海外で米軍がどのようにに駐留しているのかを明らかにする必要がある。今日の資料の最後に、アジア太平洋における米軍の分布図がある。韓国は別としても、日本にだけきわめて多くの米軍基地がある。沖縄では海兵隊の基地が大半を占めている。沖縄県がかかえる女性の被害の問題、日常的に起こる交通事故や犯罪の多くは若い兵士が一番多い海兵隊が起す例が圧倒的だ。海兵隊撤退は、沖縄の基地問題を大きく解決するための選択肢の一つだ。

沖縄県では、次第に海兵隊の撤退を求める声が大きくなりつつある。何故、「次第に」なのか。広大な範囲の基地返還の問題、海兵隊の撤退ということになると

海兵隊の撤退を！

るといってよいでしょう。

そうした言わば少数者の抵抗には、語り尽くせぬ苦勞があるのですが、だからこそ、時代が求めているものにも十分アンテナを張りつつ、持続と、新しい切り口を作り出そうとみんな頑張っています。

◆たとえば、横須賀のNEPAの会の取り組みがあります。アメリカ軍をアメリカの法律で裁こうというこの運動は、実際ワシントン地裁でたたかわれました。国家環境政策法(NEPA)の海外基地への適用はないという裁判所の判断で負けたのですが、日本政府の頭越しに直接アメリカ政府と名もない市民が交渉すること、外務省は大いにあわてたと聞いています。環境面から基地問題に切り込むという新鮮さも、全国の人々から注目され、二〇〇〇万円を超えるカンパが寄せられました。

◆インターネット上に反基地運動のホームページを開く試みも始まりました。今日の報告者の一人でもあります。相模原市議の金子さんもメンバーですが、佐世保、岩国、相模原、横田の市議が共同で解説

した「リムピース」です。沖縄に来る前に覗いてきましたが、すでに三〇〇〇人近い人がアクセスしています。

艦船の動きも、基地のテレフォンサービスや、米軍の艦船のホームページでつかめる時代です。抗議行動も電子メールで行い、基地には駆けつけないバーチャルな世界が生まれたらどうしようという心配もありますが(笑)、在宅の人の参加の道が大きく開かれたことは、大いに注目すべきでしょう。

◆平和船団という新しい試みもスタートとして一〇年になります。呉、佐世保、横須賀の軍港では、市民が自前の船を出して、軍艦の前に立ちほだかります。平和船団のキーワードは「海と遊ぶ」です。陸と違ってフェンスで囲うことができない海は、まさに安保のアキレス腱。私たちは提供水域へ合法的に船を浮かべることもできるのです。横須賀では夏休みにヨット教室も開催しました。海で遊ぶことがそのまま反基地運動になる素晴らしい出会いを発見して、遅れてきた中年アウトドアは、今日も元気に軍港に船を浮かべています。

運動の工夫と切り口の新鮮さは、新しいころみの中だけにあるのではありません。古典的とも言える手法も、周りがそれをしなくなると、静かに輝きだします。気の遠くなるような繰り返しの中から、ある種の新鮮さが生まれてくるのです。たとえば、毎日基地を見ること、毎月街を歩くこと。事が起れば、その都度行動を積み重ねること。佐世保をはじめいくつかの基地の街で、こうした行為が黙々と続けられています。そしてそれは、どこかで、人々を励ましていくのだと思います。

反基地運動の復権を

基地を舞台とする政治闘争は姿を消しつつあります。変わって登場した市民運動は、まだ小さな力しか持っていない。誤解を恐れずに言えば、この小さな力が、小さなまま勝道を探すことが大切だと思います。平和船団は大きな軍艦にゴムボートで立ち向かいます。鋼鉄のかたまりである空母を打ち負かすには、空母よりさらに強大なものを準備しなければ勝てないとしたら、多分私たちに希望はないでしょう。ゴムボートがゴムボート

(二二ページへ)

必然的に雇用の問題が起きてくる。基地の中で働く労働者の問題だけでなく、軍用地を持った地主たちも不安を持っている。しかし、これは進めたいかねばならない。四、五年後、七、八年後をターゲットにやっつけていかねばならない。普天間基地の問題にしても、海兵隊がいるから必要なものであつて、海兵隊が数年後にいなくなることを前提にすれば海上ヘリポートの建設は必要ない。

実際、海兵隊の元司令官や、沖縄で中隊長を勤めた元海兵隊将校も沖縄の海兵隊はいらないといっている。さらに、米軍のトップクラスの人々やいくつものシンクタンクの研究者たちが海兵隊の撤退を求めている。日本に駐留する米軍がこのままいいのか、駐留が必要なのか、検証が求められる時期に来ている。

海兵隊問題も含めて、海上ヘリポートの問題で一番沖縄が熱くなっているこの時期に、皆さんに沖縄にきてもらったので、現地の新聞や、沖縄基地の現状をつぶさに見ていただきたい。そして基地問題を全国的ネットワークで取り組みたい。キャッチピースだけではなく、労働組合や地域住民とも歩調のとれる運動を

作っていききたい。沖縄では、沖縄県や基地を抱えるいくつもの市町村が一緒になつて、昨年十二月二日に県民大会を開き、沖縄の兵力削減と海兵隊の米本土への撤退を求めた。本土の各地域からは、孤立しているたかひの報告もあつたが、沖縄の場合は地域も住民も自治体も、一緒になつて問題に取り組んでいる。ぜひ、本土各地の皆さんとも連携をとってやっつけていききたい。

これまで沖縄から市民運動のネットワークを求めてきたことはない。海兵隊の撤退を求めるネットワークの提案をこの場でさせていただきたい。ぜひ、今日集まっているみなさんが、沖縄からの海兵隊の撤退とそれぞれの地域での米軍の兵力削減を共通の課題として取り組む運動を、あらためて始めたい。ワークショップではアピールを検討していただき、お互いの共通の目標、横の連携の強化を求めていきたい。

資料の中に、沖縄で十二月から一月に発表された新聞記事をコピーした。兵力削減問題にかかわる現地の特集記事だ。一般市民も、兵力削減の問題を大きく受けとめている。これを是非本土の各地に

海兵隊の撤退を求めていくことなど ど四つの合意

チス議
キャッチ
ピース全
会

湯浅一郎
ピースリンク広島・呉・岩国
キャッチピース運営委員

前夜の交流会の余韻が残る中、二六日の午前中は、キャッチピース第六回全国会議を行った。進行は編集部の田巻さん。冒頭で、私が、前日の市民フォーラム・分散会の議論を踏まえて、運動の方向性について発題した。

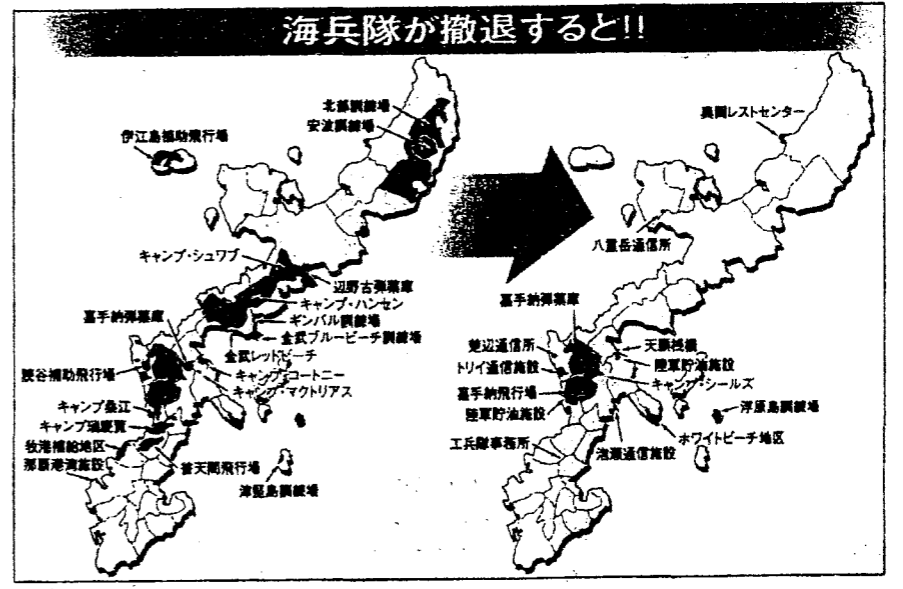
(一) 基地による人権や生活権の侵害に抗する取り組み。この中に、市民による地位協定の見直しを進める問題、低空飛行を止めさせる問題、更に環境問題などが含まれる。
(二) 人権侵害の最大の原因であり、かつ軍事的にも前進配備せねばならない必然性も薄い海兵隊の撤退を求めていく。



(三) 思いやり予算を含めた軍事費の削減を求めるキャンペーン。
(四) 進行中のガイドライン見直しと自衛隊の再編に対する取り組み。

この後、田巻さんから基地汚染に関してアメリカのNGOが活発に行動しており、日本もそれらのネットワークに参入していく必要性などが補足され、自由討論が行われた。
まず伊波さんが、動き出している沖縄での海兵隊撤退を求める運動に関して詳

持ち帰っていただいたい。



「沖縄タイムス」(九七・一・二)から

しく説明し、それをめぐって、ヤマトの側でどのような運動ができるかがしばらく議論された。

佐世保からは、今川、篠崎さんから、ベローウッドの佐世保配備は冷戦時代の遺物で、海兵隊を乗せるこれらの部隊も含め、アメリカの地方紙などに海兵隊は撤退しろと言っ意見広告を出したらどうかという提案があつた。

また演習など沖縄の基地の動きに抗議する行動形態として平和船団が浮かんできた。原潜や佐世保の揚陸艦隊が頻繁に入出港をくり返すホワイトビーチでの行動や、普天間のヘリ部隊の候補となつているキャンプ・シュワブ沖の海上ヘリポートなどの計画が動き出したときなどに活用できないかという夢のような、しかし現実味のある提案があつた。その時は、横須賀や呉、佐世保からも駆けつけねばならないねと言っ意見も飛び出した。

最後に運動の方向として確認した点を整理すると以下の通りである。

- ① 海兵隊撤退を求める沖縄の動きに呼応して、全国的なキャンペーンに取り組む。
- ② 基地による人権侵害をなくすために

キャッチピース全国会議

QDR

米国、4年に一度の戦力見直しに着手

冷戦が終結してから、米国はこれまで二度の国防計画の見直しを行ってきた。ブッシュ時代の「ベースフォース」計画と、それに現在でも政策の基調をなしていると考えられるクリントン政権の「ボトムアップレビュー」(93年9月公表)である。

「ボトムアップ」の方は、この通信でもすでに紹介があったように「二つ同時の大規模な地域紛争を戦う」ことを掲げていた。しかし当初からこの戦略には疑問が投げかけられていた。戦力の規模と国防予算がその計画にマッチしているのかという疑問である。

もはや冷戦時代のような固定した考えでは、時代に即応した国防計画は建てられないのではないかという考えから、今後は4年に一度、大統領が新しく選ばれる度に国防計画を見直すという法律「Military Force Structure Review Act」が昨年制定された。これが「国防見直しThe Quadrennial Defense Review (以下QDR)」である。

QDRは日本で言えば、「国防計画の大綱」に近いものになるが、「大綱」よりは細かく装備や制定すべき法案の勧告なども行うようである。また今後は新政権の度に計画を見直すことにしたことが新しい。QDRが「見直す」のは大別して三点。(1)アメリカが直面する脅威とその性格、(2)その脅威への対処戦略、(3)その戦略を実行する具体的な戦力構成、である。

QDRを行う主体はペンタゴンでなく、国防長官によって任命された九人の「民間人」からなる National Defense Panel

(以下NDP)である。これまでの国防総省自身の計画では、時代にあった改革が出来なかったため中立な立場で「見直し」という主旨だが、「民間」というもののメンバーの多くは軍の元將軍である。前記の法律によると、QDRは以下のような手順で八九会計年度以降の国防計画に反映される。

NDPは三月一四日に国防長官に報告書を提出し、それを長官が議会のしかるべき委員会に五月十五日を期限として提出。その後議会での審議が続けられた後、NDPが今年の十二月一日に最終報告を提出。その報告を受けて、長官は統合参謀本部議長と協議の上、自らの意見を添えて最終報告を議会の委員会に提出する。

このQDRが冷戦終結後、本当の意味での初めてのアメリカ国防計画の見直しになる。恥ずかしい話だが気の抜けた自国の「大綱」よりは、QDRの方が日本の軍事態勢、とりわけ在日米軍には決定的な影響を持つ。残念ながら中味はまだ漏れてこない。三月の最初の報告書待ちである。

確 実にいえることは、前記のQDRを定めた法律そのものが「脅威」に対する「軍事力」での対処をNDPに要求していることからも見て取れるように、根本は冷戦発想とそう違っていない。だから「前進配備」を全面撤回することもあり得ない。ただこの一年が根本の見直しの年であることは間違いないので、同盟国例えば日本での(特に沖縄での)米軍駐留を見直せという声が高まれば、それがQDRに反映されることも間違いない。(2月15日記)

・ 神奈川県の市民による地位協定の見直し案を冊子にする。
・ 低空飛行に関する自治体アンケートの報告書を作成し、政府や政党への働きかけ、自治体へのフィードバックに活用していく。更に住民、スキー連

盟、自然保護団体、山岳連盟などからの情報収集を行う。
③「思いやり予算」に焦点をあてた軍事費削減キャンペーンを続ける。
④ガイドライン見直しの動きを監視し、必要に応じて申し入れなどを行う。

最後に、全国運営委員に伊波洋一さんが復帰し、広島は林さんから大田伊子さんへ交代することを確認した。心強い味方が増え、元気になった。

しつかり エンパワーしました。沖縄で!

山中悦子 編集部

ドシヤ降りの那覇空港

青い空、青い海!そんな沖縄に到着するものとはかき思っていたのだが...。まさか日頃から雨女の異名をとる私がいながらというわけでもなかっただろうが、田巻、新倉、山中ら運営委員三名を含む神奈川からの一行六名は大雨に迎えられて那覇空港に降り立った。佐世保で開催された前回の全国会議から一年二月ぶりの全国会議ということで、全国会議と現地実行委員会と共催で開催する「市民フォーラム」基地はいらないどこにも」の成功を祈る気持ち、日頃なかな

か会えな い仲間 に 会える嬉し さ、新しい 出会いへの 期待、念願の アーへの関心等など、手にした荷物より 重いくらいの気持ちいっぱいやってきた。呉から参加の運営委員の湯浅さんも 加わり最初にタクシーを走らせたのは沖縄県庁。

県庁訪問

月刊キャッチピースに毎号好評の「沖

「基地はいらない どこでも」市民フォーラム
新市民運動に工夫が必要
基地沖繩の歴史認識を

1997年(平成9年) 1月26日 日曜日 1版 第(2)号

市民フォーラムには全国の市民運動家ら約70人が参加した。沖縄市・教育福祉会館

講演・4報告 本土側30人参加

「沖繩タイムス」97.1.26

3日間の報告

アピール

私達は、全国の米軍基地所在地や米軍の演習等で市民生活に影響を被っている地域から在日米軍基地の75%が集中する沖縄に集まり、97年1月25日と26日の両日にわたって、沖縄と日本に駐留する米軍及び米軍基地の問題について考える市民フォーラム「基地はいらない、どこにも」を開催しました。

米軍基地や日米安保について、多くの市民が必ずしも関心を示さなかった中、一昨年95年9月に起こった3米兵による少女に対する事件は多くの人々に衝撃を与え、沖縄の米軍基地問題への関心を高めました。

特に、第二次世界大戦の沖縄戦で米軍が占領して以来50年間以上も米軍基地が存在している沖縄で数多くの抗議集会や抗議行動が行なわれ、抗議のうねりは全国に拡大していきました。

沖縄県民の声を受け、大田知事が米軍用地強制使用のための代理署名を拒否する中、95年10月の県民大会に8万5千人が参加し、96年9月に行なわれた県民投票では投票者の約9割が基地の整理縮小求め、米軍基地の重圧からの脱却が県民全体の意志として確立されました。そして、沖縄県は2015年までにすべての米軍基地をなくすための基地アクションプログラムと基地跡地利用構想を策定しました。

一方、在沖米軍基地を保持し続けようとする日本政府と米国は、普天間海兵隊航空基地の全面返還を含めた11施設の返還を合意しました。さらに、日本政府は数多くの沖縄振興策を示して、軍用地強制使用に反対する沖縄県に縦覧

代行を行なわせました。

しかしながら、普天間飛行場の代替ヘリ基地の新設を筆頭に返還される11施設は全て新たに沖縄県内に移設されることが明らかになり、沖縄県民の新たな怒りを生んでいます。代替ヘリポート基地については、移設予定された各地で地域住民と自治体から大きな反対運動が沸き起こり、何箇所も移設予定地を変更し、現在はキャンプシュワブ沖に海上ヘリポートを建設しようとしています。

経費総額が1兆円を超えるような代替軍事施設の建設は、老朽化した在沖米軍施設を最新施設に更新することであり、軍事施設強化にほかなりません。経費の全ては、「思いやり予算」として日本政府の負担です。私達は、このように莫大な国民の税金が沖縄県民を苦しめる米軍基地の新たな建設に使われることに反対します。

なぜ、日本政府は「基地はいらない」と願う沖縄県民に米軍基地を押しつけるのでしょうか。なぜ、50年以上も米軍の暴力によって虐げられてきた沖縄の女性達の「軍隊はいらない」という声を無視し、米軍機の爆音のために多くの子供が未熟児として生まれ、激しい爆音に曝される現状を放置するのでしょうか。なぜ、環境と住民生活を破壊する実弾砲撃演習を行なわせ続けるのでしょうか。

米ソの冷戦が終了し米国の軍事費も大幅に削減され、多くの基地が閉鎖される中、なぜ沖縄で新たな米軍基地を建設しなければならないのでしょうか。すべての米軍が撤退したフィリ

ピンは安全保障が脅かされているのでしょうか。米軍の駐留を受け入れない東南アジア諸国の安全は脅かされているのでしょうか。米軍の撤退した国々では、戦争と直結する米軍の駐留がなくなり、むしろ安全保障は高まっているのです。

沖縄に米軍基地をどうしても維持しなければならない理由は、すでになくなっています。

52年前の占領を継続し続ける米軍用地強制使用も昨年4月から1施設で違法な状態に入っています。今年5月の期限切れによって、さらに多数の米軍基地が違法状態になるでしょう。

日本と米国の両国政府関係者ならびに政策決定者達は、そのことを率直に認める必要があります。日米両政府は、これ以上沖縄県民の犠牲の上で米軍基地を維持しようとするのを止めるべきです。

そして、日米両政府が海兵隊の撤退を含めて兵力削減に基づく米軍基地の整理縮小に着手すべき時なのです。

また、私たちは、極東有事を口実としたガイドラインの見直しやACSAの締結を通して自衛隊と米軍の連携強化が進むことに強く反対します。

私たちは、手を取り合って沖縄の人々と共に声を上げつづけます。

基地はいらない、どこにも！

1997年1月26日

市民フォーラム「基地はいらない、どこにも」第6回キャッチピース全国会議

私達は次に宜野湾市へ向かった。宜野湾市職労、そこでは明日のフォーラムの資料作りが完了していた。一部がB4裏表で四五枚にも及ぶ膨大な資料になっていた。大変な作業量であったにちがいない。市職の皆さんには心からお礼を述べた。気がつくともう八時半。昼食もとらずに夜を迎えていた。宿舎はフォーラムの会場になる那覇市の教育福祉会館。沖縄の「ちゃんぶる」で遅めの夕食。それから明日の最終打ち合わせを済ませるのもう真夜中になっていた。

市民フォーラム

ここまでで五時間。一挙都合一六人の話。冷静に考えると人間の理解の許容量を超えていたはず。けれど実際には帰る人も眠る人もなく参加者の集中力は持続

ワークショップ

ここまでの朝日新聞の記者たちを伴っての来場だった。ゾウのオリの知花昌一さんやカメラマンの石川真生さんの顔も共に闘おうと決意する人々の大きな拍手が湧いた。(ヤマトからの報告の内容はキャッチピース四九号及び次号で紹介しています。また沖縄からの報告は次号に掲載します。)

一月二十五日土曜日、「市民フォーラム」基地はいらない、どこにも」の開催日。薄曇りで少し肌寒かったものの心配していた雨はあがった。舞台には横断幕。壁には各地の基地の状況を示すパネル展示。九四年度からのキャッチピース・軍縮ハガキキャンペーンの展示も。資料準備も整い、開会の午後一時半を迎えた。会場は参加者約七〇名と多くのマスコミ関係者でいっぱい。どこかで見た人だと思つたらAERA編集長の田岡俊二氏。近く安保・米軍基地の特集を予定している朝日新聞の記者たちを伴ってのご来場だった。ゾウのオリの知花昌一さんやカメラマンの石川真生さんの顔も共に闘おうと決意する人々の大きな拍手が湧いた。(ヤマトからの報告の内容はキャッチピース四九号及び次号で紹介しています。また沖縄からの報告は次号に掲載します。)

それは参加者の意識はもろろん一つには、割り当てられた時間が短時間であったにもかかわらずメリのある話し方で要点をあざやかにクロースアップさせてくれた各スピーカーの力量に負うところ大だった。日々の地道な運動の中からの報告は貴重な情報が満載で本当に興味深いものだった。でもこれって考えてみればそれだけコトが深刻であるということ。本当にこのままでもいいのだろうか。と怒り新たに。この怒りを次なる行動のエネルギーに代えなければと本気で思う。エンパワー(力をつける)しました！

夕食後はワークショップが開かれた。一六の報告、提言を受けて「ではどうするか」「アクションプランをだ出してみよう」と話し合った。その中で何人かから、情報をより多くより正確に集め、分析し、専門性をもって提言活動に役立てようとする世間との距離が広がって広がってしまうという悩みが出された。私達には直接的なアドボカシー活動と世論形成のどちらも課せられているのだと思うのだが、これだけ無関心な世間との距離を縮められる方法があれば知りた。具体的なアクションプランは翌日の全国会議で提案された。「基地はいらない」(十八ページへ)

アピール

い、どこにも！」と大きな声を出し続けることを宣言したアピール案を検討して市民フォーラムは終わった。

基地ツアー

二六日曜日、早朝からの全国会議を無事に終えた参加者約二十名は昼食もソコソコ基地見学ツアーに出発した。翌二七日にも回り全部で十箇所ほどの基地を見た。テレビで見慣れたはずの「沖縄の基地」も現場に立つとその存在感の大きさはまるで違っていた。

衝撃的な体験もした。ヘリポートの建設予定地を真近な海にみるキャンプ・シユワープ、名護市辺野古を訪ねた時のことだった。海に突き出た防波堤の上で私たちは市民フォーラムで現場報告をしてくれた名護市職員長の島袋さんの説明を受けていた。「あの海岸で上陸訓練があります。山肌に見える赤土は戦車が通ったあとです。あの辺りにヘリポートが建設されるということです。そこにいたKさん(七六才)が突然「お願いします」と言って土下座をされた。「この美しい海を壊さないでほしい。村人を二分させるようなことはしないでほしい。」

時、広大な基地のまわりに家々が密集し、大学も二つもすぐそばにありました。大学では落ちついて勉強することが出来ているのでしょうか。そして米軍は土地ばかりでなく、空も、海も使用権が優先されているのです。ヤマトから行く沖縄は外国のような風景です。沖縄に実際に行つてこの目で見ないと、米軍の横暴を許している日本政府の姿はやはりよくわからないと思いました。

広島から帰つてから私の職場の大学の寮で、沖縄から来ている寮生と感想を話しました。キャンプシユワープの近くから来ている寮生は、友達にもいろいろ話すけれどヤマトの人は本当に沖縄のことを知らなすぎると嘆いていましたので、諦めないで折りあることに忍耐強く話していることと約束しました。もう一人の沖縄から来ている寮生は、ホワイトビーチがよく見える友達の家へよくいつていたこと、そしてよく大きな声で艦船が入つてくるのを反対しているデモの光景を見て、すごい人たちもいるのだと感心していたそうです。

「ヘリポート移設絶対許すな」と書かれた大きな立て看板を人々の目によくと

横浜の自宅に戻り辺野古の海で拾った貝殻と珊瑚をグラスに飾りながらテレビの国会中継を見ていた私は橋本首相の答弁にカッとした。「人口密集地域の飛行場は困る困るといつたから移すわけです。」私は思わず「基地はいらないんです、どこにも！」と叫んだ。沖縄が遠く

沖縄で思ったこと

出合いの喜び

大田伊杜子

ピースリンク広島・呉・岩国

十二年前に石垣島の美しいサンゴ礁の海を潰して新空港を造ることに反対している人々と連帯するため沖縄を訪れてから、このたび久しぶりに沖縄へ出かけました。今回一番私が強く感じたことは、今も沖縄は「捨て石」にされようとしているのだなあ、ということ。つまり沖縄戦の時は国体護持のために戦いが長引き、多くの住民をまきざえにした地上戦になってしまいました。今は日米安保

まる道路脇に個人で出している人もいて、沖縄人の情熱を感じました。嘉陽さんとおっしゃるおじいさんは、このヘリポートの問題が起こつてから、ここ辺野古の平和が崩れていつていて、道で出会つても、賛成派と反対派に分かれてしまつて挨拶もなくなつてしまつた。辺野古の平和を守りたいと訴えていらつしゃいました。

キャッチピースの全国会議では、各地で闘っている仲間たちに出会えたことが、何よりの喜びでした。自分と同じようなことをやっている人たちが全国にいるのだなあ、という感動です。四つほどの議題が討議されましたが、私は「海兵隊をなくす」というテーマにヤマトからも力強く関わつていきたいと思つています。このたびの劣化ウラン弾の問題で、沖縄の怒りはまた爆発しています。海兵隊の横暴をこれ以上許すことは出来ません。海兵隊をまずなくしてゆくアクションプログラムを作つていこうではありませんか。普天間基地には広島の隣町岩国に移つてくることと決定したKCI 30空中給油機が八機待機していました。沖縄問題は具体的にここ広島の問題

に遠くに思えた。沖縄を訪ねて本土との温度差なるものの正体を見たような気がする。私はこの距離感を埋めるのが私たちの役割だと認識した。

一月二十七日、私は、×回目の誕生日を迎えた日に沖縄を後にした。



「安保の見える丘」で記念撮影。後ろは嘉手納基地。

を政府が継続したいがために、やはり多くの人々の犠牲が払われ、「捨て石」になつていくということ。米兵のために思いやり予算で建てられている広い住宅地が度々バスから見えました。また普天間基地を高台から見

になつていきます。米軍機による中国山地の低空飛行の問題もあります。広島からの発信にみなさまこれからもよろしく協力ください。

最後に、この度は沖縄県議の伊波さんにお世話になり心から感謝しています。また八六ページもの資料を印刷して準備下さつた宜野湾市職労のみなさまにも御礼を申し上げます。来年またおあいしましう！ ユイマール！

種火たやさずに

宮野由美子

市民ネットワーク
させほ

「沖縄へはとでも行けない」とずつと思つてきた。それは、韓国、朝鮮、中国や東南アジアへは簡単に行けないという思いと同じ思いからだ。国が戦争の謝罪をきちんとしないうちは物見遊山的に出掛けてはならないとどこか自分を律する気持ちもあつた。しかし、今回、反基地運動を通して知り合った「キャッチピース」から、沖縄でのフォーラムの呼び掛けがあり私の気持ちは動いた。「こんなことでもなければ、行くことはない

参加者から

のだから行ってきたら」という連れ合いの言葉にも励まされて、とうとう私は沖繩へ行くことになったのだった。

佐世保からは私と軍事問題研究会の今川正美さん（キャッチピース運営委員）、篠崎正人さんの三人が参加した。フォーラムの会場には沖繩大学教授で一坪反戦地主会世話人の新崎盛暉さん、軍用地違憲共闘会議長の有銘政夫さん、それに「ゾウのオリ」の中に入った反戦地主として全国的に有名な知花昌一さんとテレビでお馴染みの顔が見えて少々緊張する。ここで私は新崎さんや新倉裕史さん（非核市民宣言運動ヨコスカ）の基調報告と共に、全国各地の運動報告に感激した。全国各地で多くの人がただ反対の掛け声だけでなく、基地の縮小、撤去へ向けて具体的な運動を自ら考え、展開しているのだ。夕食後はアクシヨンプランについてのワークショップだった。そこでは「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」のキャロリン・フランシスさん（沖繩キリスト教短大講師）がたくさん発言された。在日アメリカ人が米軍基地に反対しているそのことに私はまた感激した。延々八時間に及んだ一日目の会議

「きわめてわれわれに近い感じがする」とありがたい言葉をいただいた。首を突っ込みすぎた自分がこわい。

今回の参加は二四日に行われた基地県を中心とする平和運動センターによる「全国反基地交流集会」とのハシゴであったが、キャッチピースの会議の方が参加者は少なくとも、具体的基地問題への知恵が集まっているとの感想を抱いた。両会議で顔を合わせた数人とも感想は同じだったので客観的にもそういえると思う。特に伊波さんの言っていた海兵隊問題は今後の反基地の中で重点をおくべきものとして意識づけられた。

そういえば「この時期に行けば桜が見れる」というのはキャッチピース全国会議への参加を決めてはじめて思ったことだ。しかし、いざスケジュールを見ると結構過密。望み果たせずに終わるのか、と思ったが、またしても沖繩の人のあたたかさに助けられた。神奈川から参加した横須賀のNさん、相模原のSさんと三人の「基地を見ないで帰れない」というわがままにたいして伊波さんは会議からの離脱を許してくれただけでなく、宜野湾市職労の街宣車の手配、さらには

がやつと終わった。確かに疲れてはいしたが、それよりも高揚する気持ちのほうが強かった。全国には連帯している多くの熱心な市民活動家たちがいるのだ。

翌日会議終了後、米軍基地見学に出掛けた。ゾウのオリを見学した後「残波岬いこいの広場」で知花さんを囲んで交流会が開かれた。私は小さな声で佐世保で「種火を消さないために」細々と反基地運動を続けていると自己紹介した。知花さんは「私たちの反戦地主運動も小さかったけれど種火を消さなかったから



象のオリの前で知花さんのお話を聞く。

今大きく燃え上がっている。種火さえ絶やさなければいつか燃え上がることもできるのです。」と力強く言った。

沖繩に別れを告げる時が来た。お世話になった伊波洋一さんにお礼を言った。「これからも闘っていきましょう」伊波さんは私たちの手を握ったが、その手は大きくどんなことも跳ね返していくような力強いウチナンチュウの手だった。

知恵の詰まった会議

佐藤 治
神奈川県高教組

労働組合役員がキャッチピースの全国会議に参加させてもらった。ある意味できわめて神奈川らしいことかもしれない。他の県の労働組合の方と話していても、労働組合と市民運動が席をともにすることにについてはそんなに聞いたことがない。幸い神奈川では「いのくら」（県民のいのちと暮らしを守る共同行動委員会）の地盤があるため違和感はありません。相模補給廠監視団のある方からは

案内役として宜野湾市職労の仲村さんの都合までつけていただいた。おかげさまで中部のほとんどの基地と読谷村まで案内してもらい、おいしい沖繩ソバまでごちそうになった。懸案の桜も普天間飛行場を望む嘉数高地の公園で見ることができた。

（二〇ページから）
トのまま、鋼鉄の艦船に勝てる。そういう反基地運動を作り出さなければならぬと私は思います。

反戦や平和という、絶対的な正義を振りかざせば、人々が振り向いてくれる時代は終わりました。むしろ、そうした絶対的な言葉に寄りかかってきた平和運動、反基地運動の底の浅さが、人々から見抜かれているのではないのでしょうか。

誰もが反論できないような、絶対的正義の言葉を次から次へと投げかけるのではなく、もつと違う言葉を発見しなければなりません。軍隊とその反対側にあるもの、例えば「暴力と非暴力」「対立と協調」「破壊と共生」。反基地運動の中には、これからの社会を考えるためのキーワー

ここまでしてもらってわたしたち本土の人間の沖繩の人たちに対してなにが返せるのだろうか。思い宿題を背負った。二六日の午後からは天気も怪しくなってきました。みなさんのフィールドワークは大丈夫なのだろうかと心配しながら帰途についた次第である。それにしてもオリオンビールはうまい。

だが、たくさん隠れています。日々の行動の積み重ねそのものが、こうした未来を切り開くキーワードを本物にする力を蓄えます。ちょうどそれは、五〇年間の基地の重圧の中で頑張ってきた沖繩の皆さんが、今、自立ということでは他のどの地域の人たちより輝いているのと同じように……

基調報告としては個人的思いの強い報告になりました。個々の基地の動きについてはこのあとたくさん報告が用意されています。それらの報告をもとに、希望を大きく膨らませることができればと思います。



参加者から

沖繩から

沖繩がかわれば、アジア・太平洋がかわる

報告 23

「沖繩から」
「沖繩ボイス」
編集委員

伊波洋一
沖繩県議会議員・前沖繩中
部地区労働局長

〒901-22
沖繩県宜野湾市志真志517-1
沖繩県教平和センター
TEL 098(898)6628
FAX 098(897)6653
郵便振替 鹿児島2-11249

沖繩でのキャッチピース全国会議と市民フォーラム「基地はいらない、どこにも」に、全国各地の米軍基地所在地などから多くの仲間が集まり、一月二十五日から二十七日までの日程を無事に終えて、実行委員会の役割を果たすことができた。これまで政党や労働組合関係の集会はあったが、全国各地の米軍基地に関する草の根市民運動団体が沖繩で一同に会することは、初めてではなからうか。

沖繩に初めて来る参加者も多く、米軍基地問題に関わる皆さんが沖繩の米軍基地の現実を少しでも実感できるようにと基地ツアーも行なった。全国会議を済ませた日曜日の午後は、普天間飛行場、嘉手納基地を経

問題が起こっているのだということ再認識させた。ワークショップは参加者全員が発言しながら、相互の交流に結びつくものになった。今回の沖繩会議を実現するにあたり、宜野湾市職員労働組合から印刷協力やバスの提供、沖繩県高教組から会場の協力など多くの支援と協力を受けたことに感謝している。

今後、沖繩の反基地市民運動団がそれぞれの運動課題を広範に取り組みながら、キャッチピースを通して在日米軍基地の問題を全体的に把握していくことを期待している。

兵力削減を訴える女性訪米団

キャッチピース全国会議以降、沖繩県内では、女性訪米団が渡米し、鳥島での劣化ウラン弾実射演習が暴露されて大きな問題となり、その中で軍用地強制使用の公開審理が始まるうとしていた。今回は、訪米団の取り組みと劣化ウラン問題について報告する。

沖繩県は、今年前半の取り組みとして米軍が進めている四年毎の兵力見直しに合わせ、基地の整理・縮小には海兵隊の削減・撤退が必要であると訴えるために三次に渉る訪米団の派遣を予定している。その最初の訪米団として二月七日から十六日までの日

て読谷村を回った。もう一年ちかく国による不法占拠が続いている読谷村の楚辺通信所では、地主の知花昌一さんが自ら説明してくれて、五一年前の沖繩戦で住民が隠れた近くのシムクガマ(鍾乳洞)にも案内してもらった。このガマに多くの人が戦争を避けて生活していたが、全員が助かったところである。一方、同じく読谷村にあるチビチリガマでは、いわゆる「集団自決」があり多くの人がなくなつた場所である。知花昌一さんは、これまで読谷村を訪れる多くの人々にチビチリガマを案内してきたが、最近ではシムクガマを案内することも多くなつたようだ。

その後、読谷村残破(さんば)岬の村営レストランで夕食を取りながら知花昌一さんと交流した。

最終日の午前中に、海上に普天間基地の代替ヘリポート建設が予定されているキャンプシユワブに行つて、辺野古漁港からヘリポート建設予定地を見ながら、名護市職労委員長島袋秀雅さんからヘリポートの説明と地元の高陽宗義さんの訴えを聞いた。

高陽さんが、一番心配していたのは地域住民が賛成、反対に二分され対立し、地域の平和が乱されることだという。国内の各地から来ていた参加者に、必死にヘリポート建設を止めるように訴える姿が印象的だった。

程で、東門副知事を団長とする八名の女性だけの訪米団がワシントンとハワイを訪れた。「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」の高里鈴代さん(那覇市議)他県内の主な女性団体の代表者で構成する訪米団は、女性の立場から沖繩の米軍基地の問題を指摘した。

沖繩タイムスに連載された「うちな女・訪米直訴」報告(沢ニューヨーク通信員)からハイライトを紹介する。

ワシントンDC入りした日に劣化ウラン弾の鳥島での射撃事件が報じられ、十日に国防総省で会ったクルト・キャンベル次官補代理にまず劣化ウラン弾について抗議をすることになった。キャンベル次官補代理は、「弁解のしようがない」「三ヵ月以内に沖繩を訪問し、事故の通報体制の確立の改善策を講じて東門副知事に報告したい」と述べ、時間を四十分もオーバーして一人ひとりの団員の話を聞いたという。

しかし、QDR(四年ごとの兵力見直し)では「十万人体制は維持する」と強調し、恩納岳の不発弾処理や嘉手納基地からの爆音被害などについて善処策はなんら明確に示されなかった。

米側は後述の劣化ウラン弾問題の深刻さを一番気にしていたのではなからうか。ワシントンでは、ハワイ選出のニール・アバ・クロビー下院議員をはじめ国会議員に会い兵

有意義だった沖繩会議

市民フォーラムと全国会議の内容については、この特集号で報告されるから割愛させてもらうが、若干の感想を述べたい。今回の沖繩での会議を、以前からぜひ実現したいと思っていた。各地の皆さんに沖繩の基地問題をしっかりと実感してもらおうこと、沖繩が全国各地の運動から学び全国の平和運動と沖繩の運動が連携を取り合う機会をぜひ作りたかった。

日頃はニュースレターや新聞記事を通して互いの活動を連絡していても、年に一度は、顔を合わせて話し合う機会をもつことは大切である。フォーラムや全国会議の話合いの中で、いくつもの運動課題を確認したが、その一つは海兵隊の撤退を要求して兵力削減を求めていくことである。沖繩以外の各地では海兵隊の削減・撤退は運動課題になりにくいという発言を聞いて、私は意外に感じた。

沖繩では、米軍基地に占める海兵隊基地の大きさと米海兵隊員の犯罪などが、海兵隊撤退要求を自明のことと受けとめさせる素地があるのだということを確認した。約百名ちかくの参加者は、半数が全国各地からの参加者で半数が沖繩からの参加者だった。各地からの報告は、全国各地で米軍による

力削減を要請した。ウィリアム・ロス上院議員のスタッフが「沖繩県民に感謝する決議」を提案したことを紹介したので、高里鈴代さんが「感謝決議なんて要りません。基地の在り方は県民の基本的な人権を侵害し、環境を破壊している。望んでいるのは、問題を軽くしてほしいということ」と反論した。

沖繩女性の優しさとしたたかさ

民間団体との交流も行なわれたが、政府関係と違って感情むき出しで訪米団を迎えた。カーネギー国際平和財団では、東門副知事が約三十分間訪米の目的などを話した後、質疑応答で「沖繩からわざわざワシントンに来る必要はない。東京に行くべきだ。二〇一五年までに基地の完全撤去をというなら、子供たちに中国語を教え始めた方がいい」との意地悪い質問がメディア関係者からあった。東門副知事は、「子供たちに中国語を、ということですが、沖繩は国際拠点都市構想計画をもっており、中国語だけでなく、韓国語も教える計画が進めております」「もちろん東京には何度も何度も要請してまいります。しかし、銃剣とブルドーザーで米軍に強制的に土地を接収された沖繩、その沖繩で戦後五〇年以上たった今、米軍基地がどのような被害をもたらしているのか、それを米国民に知ってもらうために来

車や軍艦の鉄板を貫通させることができ。さらに衝撃で金属ウランが粉末となつて飛散し空気に触れて燃え上がり、中の兵士を焼き殺す。この効果を利用した「徹甲焼夷弾」(Penetrator)を、米軍は全軍に配備した。一九九一年、湾岸戦争でDU弾は初めて戦場で使われた。

●米国では、湾岸戦争帰還兵士やその子供たちの間で、肺ガン、リンパ腫、先天性疾病など原因不明の病気が異常な高率で発生していることが社会問題となつてい。いわゆる「湾岸戦争症候群」だ。この有力な原因として同士打ちや火災・爆発事故などによるDUの吸引・摂取があると多くの専門家が指摘しているが、米政府はその因果関係を認めていない。湾岸戦争を告発する市民法廷の主宰者として知られるラムゼー・クラーク元司法長官らは、戦争後のイラクを訪れ、子供たちの間で湾岸帰還兵士と同じ症状が多数発生していることを確認している。

国連決議に反対した米国

●DU弾の危険性を誰よりも知っているのは米軍自身だ。米陸軍環境政策研究所は九四年六月、連邦議会に提出した報告

書の中で、DU弾が戦車に命中すると「その七割がエアロゾル(噴霧)化し、ウラン酸化物が周辺を汚染する可能性がある」と述べ、「化学・放射能性の疾患が起り得る」と、危険性を認めている。米軍関係のホームページを開いて、「劣化ウラン」をキーワードに検索すると、多くの技術論文が出てくる、それを読むと閉鎖・返還される射撃場での不発弾処理でDU弾による汚染の実態調査、環境浄化が問題になりつつあることが窺える。

●九六年八月二十九日、国連人権小委員会は、非人道的で環境に有害な、無差別大量殺りく兵器の製造と拡散を抑制することを求める決議を採択した。ここで、DU兵器は、核兵器、生物化学兵器、ナバーム弾、クラスター爆弾などとともに、製造と拡散を抑制するべき兵器とされた。決議は賛成十五、反対一、棄権八で可決された。唯一反対票を投じたのは米国であった。米国は、決議からDUをはずすよう要求した。

問われる安保地位協定

●以上駆け足で、DU弾の正体を書いてきた。日本政府は当初からこの問題で

編集室から

●沖繩で会った何人かから「キャッチピースの編集後記がもしろい」と言われた。まず最初に読む、という人もいた。したがって、余り下品なくだらないことばかり書くではないぞ、(ま)よ。ところでキャッチピースの第三法則によれば、「編集後記」はだいたいにおいて次のような理由により発生する。その一、本文に書けなかったがどうしてもいいことを編集者の特権を使つて書いてしまう場合。その二は、最後に空

てしまったこの穴をどうするかという、現場合わせ土木作業的事情である。実際には、まあ三対七位の割合で「その二」が多いのだが、次に書くのは「その一」の方なのだ。(た) ●知花さんの案内でシムクガマに行った。象のオリから小道をたどり谷戸を下りきったところにそのガマ(天然の洞窟)があった。そこで聞いた話がわすれられない。読者の海岸に米軍が上陸して来たとき、このガマには約一〇〇〇人の住民が避難していた。その中に、ハワイ帰りの二人の老人がいた。過去に軍への協力を拒否したことで「非国民」よばわりされていた人たちだった。やがて米軍がこのガマにも迫ってきた。「捕虜に

なるより闘って死ね」と教え込まれていた住民の中には、竹やりで米兵を迎えようとするものもいた。二人の老人はそれを必死に押さえ、米軍と交渉をする。そして、住民全員が捕虜となった。一人の犠牲者も出さずに。すぐ近くにあるチビチリガマとは全く違うことがここでは起こったのだ。あの沖繩戦のさなかでさえ、武器をとらない勇気が人々の命を守った。娘が中学を卒業する来年春には沖繩を旅したい。そして、シムクガマを訪ね、本当の勇気とは何なのかということ語り合いたいと思う。(た) ●沖繩に行つて沖繩の新聞を読んだ。去年名護で起きた女子中学生拉致殺害事件を扱ったコラムがあった。逮捕された容疑者がヤマトウンチユウとわかつてウチナンチュは「ヤマトウーの仕事だったか」と怒りや憎しみを表したという。「ヤマトウー」は反感のこめられた蔑称。林道の脇に遺体をゴミのように投げ捨てた残酷さにウチナンチュがこう叫んだことを当のヤマトウンチュとヤマトウーの何人が知るだろう。(や)

原子力艦 入港情報

(90)

1997.1.1~1997.2.20

S=原子力潜水艦(原潜) スタージョン級
L=原子力潜水艦(原潜) ロサンゼルス級

横須賀

- ◆ 02/03 14:37 原潜ロサンゼルス(L) 入港。
 - ◇ 02/13 10:00 原潜ロサンゼルス(L) 出港。
 - ◆ 02/18 10:06 原潜ロサンゼルス(L) 入港。
- 横須賀累計(うち原潜): 2(2)

佐世保

- ◆ 01/13 14:16 原潜サンタフェ(L) 入港。
 - ◆ 01/16 10:04 原潜タニー(S) 入港。
 - ◇ 01/17 09:42 原潜タニー(S) 出港。
 - ◇ 01/22 10:03 原潜サンタフェ(L) 出港。
 - ◆ 01/31 10:24 原潜トピカ(L) 入港。
 - ◇ 02/08 09:57 原潜トピカ(L) 出港。
 - ◆ 02/08 13:54 原潜タニー(S) 入港。
 - ◇ 02/18 12:40 原潜タニー(S) 出港。
- 佐世保累計(うち原潜): 4(4)

初伊比子(沖繩・勝連町)

- ◆ 02/13 10:02 原潜トピカ(L) 入港。(沖泊)
 - ◇ 同日 10:25 原潜トピカ(L) 出港。
- 初伊比子累計(うち原潜): 2(2)

●1997.1.1から2.20までの各地の原子力艦入港数:

横須賀	2(2)
佐世保	4(4)
初伊比子	1(1)
合計	7(7)

(注)前号(90)の97年のデータに誤りがありました。取り消します。

(次ページ上段へ)

会計報告

(97.1.17~2.19)

[収入]

○前月からの繰越し	577,616
○今月の収入	81,910
会費収入	73,500
(内訳) 維持団体	24,000
維持個人	0
参加団体	0
参加個人	0
通信会員	49,500
カンパ収入	2,000
預金利子	30
資料収入	6,380
運動収入	0

[支出]

●今月の支出	114,372
事務所代 (2、3月分)	80,000
水道光熱費	7,268
電話FAX費(12月分)	3,409
郵送費	0
文具・備品	0
印刷・コピー代	12,669
郵便振替等手数料	830
雑費	10,196

●次月への繰越し 545,154

*行動費は行動プロジェクト毎の独立採算となっているため、それにあてはまらない収支のみがこの欄に計上されます。

編集室から

(前ページ下段から)
 しまうのだ。困る。これは困る。六〇分以上もずつと「うーむいいわいいわ」と心からカンドーし続けているヒトが本当のところ何人いるのだろうか。気の早い人なら「むらさ来」で大生二杯とレモンハイ、それに焼きとり、大根サラダ、サシ盛りをやっつけてお勘定、といけるタイムではないか。劣化ウラン事件で皆走り回っていると言っているの、僕はまだしてもこのようなことを言っているのだ。さて「敬老の滝」にでも行くか。(ま)

も二でもない、お詫びと訂正です。四九号の12ページ、東條雅紀さんの肩書きを「米軍機の低空飛行訓練に反対する県民行動委員会」とするべきところ、何を血迷ったか「県民行動委印鑑」としてしまった。別に今すぐ全員委任状とハンコを持って五番窓口に出頭せよといっているのではない。もうしわけない。東條さん失礼しました。(た)

●またもや出てくる私をお許しください。沖縄報告が予定以上のボリュームで、お正月に書いて貰った原稿がまた掲載できなかった。Kさん、ごめんなさい。(た)

月刊キャッチピース

No.50 (通巻129号)

発行●脱軍備ネットワークキャッチピース
 連絡事務所●〒222 横浜市港北区錦ヶ丘
 10-4 ハイッ幸1-B

☎・FAX 045(433)3483

E-MAIL : tamaki@ab.mbn.or.jp

編集●月刊キャッチピース編集委員会
 郵便振替●00160-7-136148キャッチピース
 定価●100円 (通信会員年間3000円)

お◆知◆ら◆せ

●沖縄会議とその後のあわただしさの中で、49号の発送が出来ず、今号と合わせてお送りすることになってしまいました。前回の発送から2ヶ月も間があき申し訳ありません。1月から新しく読者になったかたからは「どうした」と問い合わせもいただきました。慢性的人手不足状態に免じてお許しください。

●事務所にFAXが入りました。電話と自動切替です。今後はこちらへよろしく。